

オノマトペに見るジャワ語の音象徴

Wirasti Angreni

山形大学地域教育文化学部特別聴講学生

ブラウイジャヤ大学文化学部日本文化学科

山 本 広 志

(山形大学地域教育文化学部)

山形大学紀要（教育科学）第15巻第3号別刷

平成24年（2012）2月

オノマトペに見るジャワ語の音象徴

Wirasti Angreni

山形大学地域教育文化学部特別聴講学生
ブラウイジャヤ大学文化学部日本文化学科

山本 広志

山形大学地域教育文化学部

(平成23年10月3日受理)

要 旨

ジャワ語オノマトペの音象徴に普遍性があるかどうかを調べるため、ジャワ語学習経験のない日本語母語話者の実験協力者にジャワ語オノマトペの対を聴いてもらうという実験を行った。ジャワ語のオノマトペには日本語の「トントン」と「ドンドン」のように、同じ場面で使えて一部の音素のみが異なるオノマトペの組が多くある。ジャワ語オノマトペの場合も「トントン」「ドンドン」と同じように、表現している様子に強弱の違いがある。こうしたジャワ語のオノマトペを2つずつ組み合わせて実験協力者に聴いてもらい、どちらの方がより強い様子を表すか、感じたままを選択肢から選んでもらった。

この実験の結果、ジャワ語を学んだことがないにも関わらず正解の方が多く、音象徴に一定の普遍性があるということが明らかになった。

§ 1. 序

1.1 オノマトペと音象徴

オノマトペは音や様子を描写する単語で、多くの言語に存在する。使用頻度は言語によって異なるが、日本語やジャワ語では大人も子供も日常的に使用する。日本語はオノマトペの豊富な言語だと言われていて、特に漫画ではオノマトペが多用されている。オノマトペには永年使用されるものが多くある一方、新語や死語も少なくない。

オノマトペは擬音語と擬態語に分類できる。擬音語とは動物の声や何かの音などを表した言語音のことをいい、擬態語とは物事の状態や身ぶりなどの雰囲気や如何にもそれらしくたとえた言語音のことをいう。

一般には単語の音と意味の間に直接の関係はないと考えられている。しかし、オノマトペのように類像性が認められる場合もある。田守らは日本語のオノマトペが普遍的な音象徴に基づくものかどうかを調べるために、日本語と英語のオノマトペを比較した。その結果、両言語に共通点があることを示し、これを普遍的な音象徴によるものとした。¹⁾

一方ジョーデンは、母語の習得過程で音と意味が結びつく学習効果が生じることから、日本人がオノマトペの音から意味を感じ取れるのはオノマトペの言語音と意味が普遍的な

音象徴で結びついているためとは限らないと述べた。²⁾ また、岩崎らは英語母語話者が捉える日本語の擬音語の印象に、日本語母語話者と共通するものとそうではないものがあることを示した。清音・濁音に対する感覚の中で、英語母語話者と日本語母語話者の「快さ」や「美しさ」についての感覚には違いがある。³⁾

また、田守は日本語のオノマトベの有声音・無声音について次のように述べている。日本語には「トントン」と「ドンドン」のように、有声音と無声音の対を成すオノマトベが多数存在する。これらは基本的には同じ出来事を描写するが、有声音の方がより大きい、多い、強い、または激しい様子を表現する。⁴⁾

これまでオノマトベの研究は日本語や英語など多くの言語で行われてきた。しかしジャワ語のオノマトベに関する研究はほとんどなく、Uhlenbeck がジャワ語オノマトベの特徴を簡単に紹介している程度に過ぎない。⁵⁾

1.2 ジャワ語

インドネシアは島国で国土が1万以上の島から成り、総面積は日本の5倍ある。ジャワ島はインドネシアの島の一つで、面積が13万 km²と日本の東北地方と関東地方を合わせたよりも広い。

ジャワ語はオーストロネシア語族インドネシア語派に属する。ジャワ語はジャワ島を中心に分布し、古くは9世紀の文献が存在する。ジャワ語を使う人は8千万人いて、ジャワ島のうち首都ジャカルタを除く地域で話されている。ジャワ語には中央ジャワ方言、東ジャワ方言、西ジャワ方言の三つの主要な方言がある。小中学校では中央ジャワ方言がジャワ語として教えられている。本稿でも中央ジャワ方言をジャワ語とする。

ジャワ文字について石井は「八世紀の中頃までは南インド伝来のパッラヴァ文字が使用されており、これがカウイ（古ジャワ）文字へと変化したと言われます。」「現代ジャワ文字はこのカウイ文字が発展したもので、基本は20文字ですが、『サンダガン』や『パサガン』と呼ばれる文字記号を組み合わせて表記します。」⁶⁾と述べている。(図1)

ジャワ文字は小中学校で教えられるものの、実生活でジャワ文字を使う人は少なくなってきた。現在ではジャワ文字をラテン文字に置き換えてジャワ語を表記する方法が主流となっている。それに従い、本稿でもジャワ語の表記にラテン文字を使用する。

ジャワ語の母音の発音は [a] [i] [u] [e] [ə] [o] の6種類があるとされ、⁸⁾ この他に異音のみに現れる [ɔ] と [ɛ] がある。ジャワ語の母音は曖昧母音 [ə] 以外にそれぞれ異音を持つ。A は [a] と発音するが、異音の [ɔ] と発音する単語もある。例えば「larane」(痛み)という単語は [larane]、「lara」(痛い)という単語は [lɔrɔ] と発音する。

I は [i] と発音するが、異音の [e] と発音する単語もある。例えば「panci」(鍋)は [panci]、「kancil」(ジャワマメジカ)は [kancel] と発音する。

U は [u] と発音するが、異音の [o] と発音する単語もある。例えば「wulu」(羽)は [wulu]、「tuyul」(ジャワ島の化け物)は [tuyol] と発音する。

E は [e] と発音するが、異音の [ɛ] と発音する単語もある。例えば「lele」(なまず)は [lele]、「bebek」(家鴨)は [bɛbɛk] と発音する。

O は [o] と発音するが、異音の [ɔ] と発音する単語もある。例えば「loro」(二つ)は [loro]、「bolong」(穴が空いている)は [bɔlɔŋ] と発音する。

 ha	 na	 ca	 ra	 ka
 da	 ta	 sa	 wa	 la
 pa	 dha	 ja	 ya	 nya
 ma	 ga	 ba	 tha	 nga

基本文字（斜線の左上）とパサガン（斜線の右下）

Wulu = i	Pada lungsi = titik
Suku = u	Pada pangkat
Taling = e	Cakra ra = ra
Taling tarung = o	Cakra keret = re
Pepet = e	Cakra la = la
Layar = r (mati)	Cakra wa = ... wa
Wignyan = h (mati)	Pangkal = ya
Cecak = nga (mati)	pa cerek = re
Pangkon = paten	nga lelet = le
Pada lingsa = koma (,)	pada adeg-adeg

サンダガン

図1 ジャワ文字⁷⁾

Marsono は、現代ジャワ語の異音は古代ジャワ語の特徴を引き継いでいると述べている。9～13世紀に用いられた古代ジャワ語には10の母音と16の異音があった。⁹⁾

ジャワ語の子音の発音は [p] [b] [t] [d] [ʈ] [ɖ] [c] [j] [k] [g] [ʔ] [s] [h] [w] [l] [r] [y] [m] [n] [ɲ] の21種類があるとされ、⁸⁾ この他に異音のみに現れる [ʃ] と [ɳ] がある。(表1)

表1 ジャワ語の子音

		唇音	歯音	そり舌音	硬口蓋音	軟口蓋音	声門音
閉鎖音	緊張音	[p]	[t]	[ʈ]	[c]	[k]	[ʔ]
	弛緩音	[b]	[d]	[ɖ]	[j]	[g]	
鼻音		[m]		[n], [ɲ]	[ɲ]	[ŋ]	
摩擦音				[s], [ʃ]			[h]
接近音		[w]		[r], [l]	[y]		

子音の中では K、N、S のみが異音を持つ。K は語頭か語中にある場合は [k] と発音されるが、語尾にある場合は [ʔ] と発音される。例えば「petik」(槌) は [petɪʔ]、「kodok」(蛙) は [kɔdɔʔ] となる。

N は、硬口蓋閉鎖音の [c] か [j] またはそり舌閉鎖音の [ʈ] か [ɖ] が直後にある場合は硬口蓋音の [ɲ] と発音する。例えば「panjang」(長い) は [paɲjaŋ] となる。また、N の直前に R があると N は [ɳ] と発音する。例えば「warna」(色) は [waɳna] となる。

S は R の直後に来る場合、またはそり舌閉鎖音の前に来る場合は [ʃ] と発音される。例えば「warsa」(時期) は [waɳʃa] となる。

ジャワ語の閉鎖音を安直に無声音・有声音と分類している文献も少なくないが、Ladefoged らはこの点について詳しく述べている。ジャワ語の2種類の閉鎖音は、無声音・有声音でも無気音・有気音でもなく、緊張音 (stiff voice) と弛緩音 (slack voice) である。[p] [t] [k] [ʈ] [c] のような緊張音は声門を狭め、喉頭を収縮させて発音する。一方 [b] [d] [g] [ɖ] [j] のような弛緩音は声門がやや開いて氣息が穏やかに流れる。声帯は大きく開く。どちらも閉鎖中は声帯の振動がない。¹⁰⁾

ジャワ語の語順は SVO で、時制は動詞の語尾変化によってではなく、時の副詞によって表現する。過去、現在、未来を言い表したいときには、「wingi」(昨日)、「saiki」(今)、「sesok」(明日) のような時を表す副詞を添える。例えば「私は昨日ご飯を食べました」は、

Wingi aku mangan sega
昨日 私 食べる ご飯

となる。

ジャワ語は植物や動物の各部分を細かく別々の単語で言い分ける特徴がある。植物なら葉、種、花などの各部分がそれぞれ別の単語で呼ばれる。例えば、日本語では菊の各部分を「菊の葉」「菊の花」などと呼ぶが、ジャワ語では、バナナの木は「debog」、葉を「ujungan」、若葉を「pupus」、枯れた葉を「klaras」、バナナの花を「ontong」、バナナの実を「gedhang」

と呼ぶ。さらに、子供の呼び方も兄弟の数や生まれる時間によって違う。例えば、一人息子は「ontang-anting」、二人娘は「kembang sepasang」、ちょうど太陽が昇るときに生まれた子供は「julung kembang」などと呼ぶ。

ジャワ語には敬語がある。ジャワ語は絶対敬語で、例えば「両親は今、姉の家におります」をジャワ語にすると「両親は今、姉の家いらっしやいます」のような表現になる。ジャワ語の敬語は3段階に分類され、普通体 (Basa Ngoko = ンゴコ体)、中間体 (Basa Madya = マディヨ体)、丁寧体 (Basa Krama = クロモ体) と呼ばれる。

§ 2. 研究目的および方法

2.1 目的

11で述べたようにこれまでジャワ語に関する研究はあまり行われていない。本稿ではオノマトペを取り上げ、ジャワ語オノマトペの音象徴に普遍性があるかどうか調べることを目的とする。

2.2 実験方法

ジャワ語学習経験のない日本語母語話者44名を実験協力者として、ジャワ語オノマトペを2つずつ組にした音声の録音を、静かな場所で2回ずつ聴いてもらった。2つのジャワ語オノマトペは日本語で言えば「トントン」と「ドンドン」のように同じ場面で使うことができ、しかも単語中の音素が一部しか変わらないものを組み合わせてある。このことによって異なる部分の音象徴を比較することができる。実験協力者には、2つのオノマトペを聴き比べ感じたままを選択肢から選ぶように依頼した。選択肢は4つあり、例えば

ドアをノックする音です。どちらの方が大きい音の表現に感じますか

- | | |
|----------------|-----------------------|
| a. 一番目の単語 | b. 二番目の単語 |
| c. 発音が区別できなかった | d. 発音は区別できるがどちらとも言えない |

のように、a～dの中から1つを選んでもらう。これを19のジャワ語オノマトペの組 (表2) について行った。

実験に使った録音は、ジャワ語母語話者である筆者が発声し録音した。明瞭に聴こえ、かつ2つのオノマトペが対等に聴こえるよう、満足の行く録音ができるまでやり直した。そして2つのオノマトペの音声と同じ大きさに聴こえるよう、画面上で音声の波形を確認しながら音量を設定した。

実験協力者はジャワ語学習経験のない44名の日本語母語話者で、女性29名、男性15名、年齢は10代から80代だった。実験は2011年1月～7月に行った。

ところで、前述したように組にしたジャワ語オノマトペは単語中の一部の音素だけが異なっている。異なる音素が母音の組を実験1、子音の組を実験2とした。(表2) ただし実験協力者が意識しないよう、実験の順序は実験1と実験2を混ぜて行い、分析の時点で分離した。実験1は11組で、異なる母音の対はEとU、EとO、OとU、IとU、IとOの5種類がある。実験2は8組で、異なる子音の対はPとB、TとD、KとG、SとGの4種類がある。

表2 実験に使用したジャワ語オノマトペ

番号	実験 1/2	オノマトペ1 [発音記号]	オノマトペ2 [発音記号]	意味
1	1	Breg [bræg]	Brug [brug]	人が倒れた音
2	2	Plung [pluŋ]	Blung [bluŋ]	水面に物が落ちる音
3	2	The1 [thəl]	Dhe1 [dhəl]	紐や糸が急に切れる様子
4	2	Pyak [pyak]	Byak [byak]	髪の毛など量が多いものを手で掻き分ける様子
5	1	Thig [thig]	Thug [thug]	プラスチックなどを軽く叩く音
6	1	Dher [dher]	Dhor [dhor]	鉄砲を撃つ音
7	1	Brol [brɔl]	Brul [brul]	草を抜く音
8	1	Howok-howok [hɔwɔkhɔwɔk]	Huwuk-huwuk [huwukhuwuk]	火が燃える音
9	2	Krak [krak]	Grak [grak]	木の板や棒を踏んで割れた音
10	2	Tut [tut]	Dut [dut]	おならの音
11	1	Bel [bəl]	Bul [bul]	火がつく音
12	2	Tok-tok [toktok]	Dok-dok [dokdok]	扉を叩く音
13	2	Sreg [sræg]	Greg [græg]	机などを引きずる音
14	1	Cret [cret]	Crot [crot]	どろっとした液状のものを入れた袋が破れて中身が出てしまう様子
15	1	Crit [crit]	Crot [crot]	どろっとした液状のものを入れた袋が破れて中身が出てしまう様子
16	1	Crit [crit]	Crut [crut]	どろっとした液状のものを入れた袋が破れて中身が出てしまう様子
17	2	Krauk [krauk]	Grauk [grauk]	せんべいなどを食べる音
18	1	Ler [lɛr]	Lur [lur]	餅を引っ張ってちぎる様子
19	1	Hewes-hewes [heweshewes]	Howos-howos [hɔwɔshɔwɔs]	強い風が吹き続ける音

§ 3. 結果および検討

3.1 実験1

実験1の結果を図2に示す。相違する母音の組み合わせがどの対でも不正解より正解が多かった。実験1全体では正解が50%、不正解が30%、「発音が区別できなかった」が1%、「発音は区別できるがどちらとも言えない」が19%だった。

最も正解率が高いのはIとUの対で正解が61%、不正解が27%だった。次いでOとU

の対の正解率が高く正解が55%、不正解が25%だった。その後にIとOの対、EとOの対が続き、最も正解率の低いEとUの対でも正解43%、不正解33%と正解の方が多かった。

「発音が区別できなかった」は最高でも2%しかなく、ほとんどが聞き分けできている。

実験1では、日本語母語話者に不利な要因が2つある。1つは、日本語のオノマトベに多くある対が「トントン」と「ドンドン」のように子音の相違であって、実験1で対象とした母音の相違するオノマトベ対が日本語にはないことが挙げられる。

もう1つの要因として曖昧母音 [a] が挙げられる。日本語には曖昧母音がなく聞き慣れていない。実験1ではEとUの対にのみ曖昧母音が現れるが、実際EとUの対の正解率が最も低い。

以上のような不利な要因があるにも関わらず、実験1全体で正解が50%と不正解の1.7倍に達した。OとUの対やIとUの対では正解が不正解の2倍以上になっている。このことから、オノマトベに現れるジャワ語母音の音象徴は一定の普遍性があると言える。

なお、オノマトベに現れるジャワ語母音の意味の強さの順は、[a] > [u] > [o] > [e] > [i] の順である。

3.2 実験2

実験2の結果を図3に示す。実験2全体では正解が45%、不正解が31%、「発音が区別できなかった」が11%、「発音は区別できるがどちらとも言えない」が13%だった。しかし内訳を見ると、子音の組によって結果はかなり異なっている。まずTとDの組み合わせは正解率が高く、正解が58%に対して不正解は22%に過ぎない。ジャワ語のTは緊張音、Dは弛緩音で日本語の発音とは異なるが、ジャワ語学習経験のない日本語母語話者には日本語の近い音、即ちTが無声音、Dが有声音に聞こえやすいと考えられる。すると弛緩音の方が強い様子を表すジャワ語オノマトベの音象徴が、有声音の方が強い様子を表す日本語オノマトベの音象徴と合致し、正しく感じ取ることになる。その意味で音象徴の普遍性

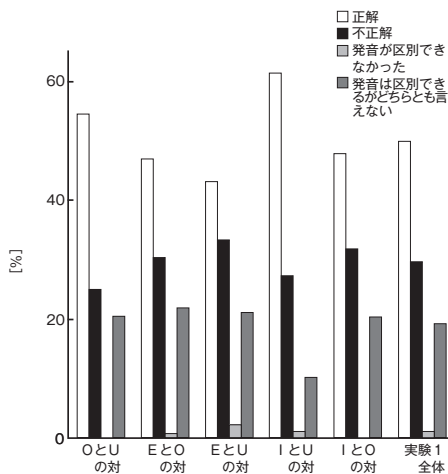


図2 実験1 (母音) の結果

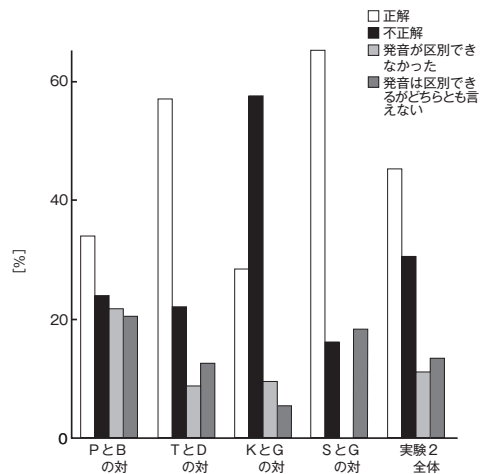


図3 実験2 (子音) の結果

が認められる。

PとBの組み合わせでも同様のことが予想されるが、結果を見ると正解が34%、不正解が24%だった。正解が多いものの差はTとDの組み合わせほど大きくはない。そして「発音が区別できなかった」と「発音は区別できるがどちらとも言えない」が他の組よりかなり多く両者とも20%に達している。「発音が区別できなかった」が群を抜いて多いことから、Pの緊張音とBの弛緩音は日本語母語話者には聞き取り難いということが分かった。

一方、KとGの組み合わせでは正解が28%、不正解が58%と不正解の方が圧倒的に多かった。不正解の方が多かったのはこの組み合わせのみで、他にはない。ジャワ語オノマトベではKやGの直後にLやRが続く場合が多く、今回実験に使った単語はKとGの直後にRが来ている。日本語にはないKとRやGとRの連続音が日本語母語話者に正解とは異なる受け取られ方をしたのかも知れないが、本当のところは分からない。KとGの組み合わせでは音象徴の普遍性は認められない。

ところで、日本語オノマトベの対は「ト」と「ド」など清音と濁音の相違が多く、SとGといった組み合わせはない。今回実験したSとGの対は「発音が区別できなかった」という回答が皆無で、日本語母語話者にとって聞き分けやすかったと言える。そのため正解率にはっきりとした傾向が現れた。SとGの対は正解66%に対して不正解が16%しかなく、正解率が最も高い。SとGの対には音象徴の普遍性が認められる。

唯一不正解の方が多かったKとGの組み合わせを除いて実験2を集計すると子音全体で正解51%、不正解22%となり、正解が不正解の2.3倍に達する。音象徴の普遍性が認められる組み合わせに限って見ると、実験1（母音）よりも普遍性が顕著であると言える。

§ 4. まとめ

ジャワ語オノマトベの音象徴に普遍性があるかどうかを調べるため、ジャワ語を学んだことのない日本語母語話者の実験協力者にジャワ語オノマトベの対を聴いてもらうという実験を行った。ジャワ語のオノマトベには日本語の「トントン」と「ドンドン」のように、同じ場面で使えて一部の音素のみが異なるオノマトベの組が多くある。こうしたオノマトベを2つずつ組み合わせさせて実験協力者に聴いてもらい、どちらの方がより強い様子を表すか、感じたままを選択肢から選んでもらった。その結果、次のことが分かった。

- 異なる音素が母音のオノマトベ対の実験全体では、正解が50%、不正解が30%だった。ジャワ語を学んだことがないにも関わらず正解が多いという結果は、音象徴に一定の普遍性があるということを示唆している。
- 異なる音素が母音のオノマトベ対の実験で最も正解率が高かったのは、異なる音素がIとUの組み合わせで、正解が61%、不正解が27%だった。次いでOとUが正解55%、不正解25%だった。曖昧母音の出現するEとUの組み合わせは正解率が最も低い、それでも正解43%、不正解33%だった。全ての組み合わせで正解が不正解より多かった。
- 異なる音素が子音のオノマトベ対の実験全体では、正解が45%、不正解が31%だった。
- 異なる音素が子音のオノマトベ対の実験で正解率が高かったのは、異なる音素がSとGの組み合わせとTとDの組み合わせで、それぞれ正解が66%と58%、不正解が16%と

22% だった。これらについても音象徴に普遍性があると言える。一方、KとGの組み合わせは正解28%、不正解58%と唯一不正解の方が多かった。KとGの組み合わせでは音象徴の普遍性は認められない。

謝辞

実験に協力してくださった方々に深く感謝する。英文題名および英文要旨は山口常夫教授から有益な助言をもらって執筆された。本研究は山形大学教育研究基盤校費によって行われた。

文献

- 1) 田守育啓、ローレンス・スコウラップ『オノマトペ ―形態と意味―』くろしお出版 (1999).
- 2) エノリア H. ジョーデン「擬音語・擬態語と英語」『日英語比較講座 4 発想と表現』大修館書店 (1982) 111-140.
- 3) 岩崎典子、デイビット ヴィンソン、ガブリエラ ヴィリョコ「擬音語の感覚」『言語学と日本語教育IV』くろしお出版 (2005) 233-246.
- 4) 田守育啓『オノマトペ 擬音・擬態語をたのしむ』岩波書店 (2002).
- 5) E.M. Uhlenbeck 「Peripheral verb categories with emotive-expressive or onomatopoeic value in modern Javanese」 *Travaux linguistiques de Prague* 4 (1971) 145-156.
- 6) 石井和子「ジャワ語」 *月刊言語* 20 (5) (1991) 70-71.
- 7) G. Setyo Nugroho, M. Abi Tofani『Pinter Basa Jawa』Kartika (2006).
- 8) B Nothofer 「Javanese」『Concise Encyclopedia of Language of the world』 (2009) 560-561.
- 9) Marsono 「Fonem vokal bahasa Jawa kuna dan alofon-alofonnya」 *Humaniora* (10) (1999) 56-62.
- 10) Peter Ladefoged, Ian Maddieson『Sounds of the world's languages』Blackwell (1996).

Summary

Wirasti Angreni, YAMAMOTO Hiroshi : Sound Symbolism of Javanese Onomatopoeia

In order to find out if there are universal features in sound symbolism of Javanese onomatopoeia, an experiment was conducted. Participants who were native speakers of Japanese without knowledge of the Javanese language listened to the pairs of Javanese onomatopoeia in the experiment.

There exist many pairs of Javanese onomatopoeia, similar to such Japanese pairs as "ton-ton" and "don-don", which involve voicing opposition and difference in sound quality, used in the same situation with a mere replacement of a phoneme. Some pairs of Javanese onomatopoeia were selected for the experiment. Participants listened to the pairs, and were then asked to choose one which they sense heavier or louder than the other. The participants' choice of correct answers outnumbered the wrong ones, despite the fact that they have never learnt Javanese.

The results show that there is a certain universality of sound symbolism of Javanese onomatopoeia.